満洲字表記の漢語に基づく近世中国語音の研究
『満文三国志』を資料として

鋤田　智彦

【論文概要】

『満文三国志』は明代中国白話小説『三国志演義』を満洲語訳したものであり、『三国志演義』を初めて外国語訳した作品とされる。先に出版された版本は順治 8 年（1650 年）の序が附せられていることから「順治本」と呼ばれ、全て満洲語で書かれている。雍正年間にはそれを元に漢文が加えられ満漢合璧形式として作られた「雍正本」と呼ばれる版本が現れた。満洲資料を用いた漢語研究というのはこれまでも日本、中国、韓国などで既に行われてきた。それらの多くは『清文啓蒙』『清文鑑』『音韻逢源』『円音正考』など、雍正以降の資料に基づくものであり、順治以前の資料に対する研究は、その資料の少なさもあり、余り注目されてこなかったと言える。満洲人は入関以降、多くの面で急速に漢化が進み、言語においてもそれは例外ではなかった。そのような状況の中、比較的早期の満洲語資料である『満文三国志』に注目し、そこに反映された満洲文字による中国語音表記の分析を行い、当時の中国北方語音の一面を明らかにしようというのが本論文の目的である。本論文は序章及び第 1 章から第 5 章、そして終章から成る。

序　章

序章ではこれまで行われてきた満洲語資料による漢語研究について、年代を追って改めてまとめ、また、それらの先行研究に対する概説、そして本論文における研究目的、方法を提示することを目的とした。

第 1 章　『満文三国志』について

本章では『満文三国志』の編纂の経緯、また、順治本および雍正本を主とし各種版本の解説を行い、さらにそれぞれの資料の所蔵状況について述べ、さらに本論文で用いる満洲文字のローマ字転写法、及び満洲語の音韻について取りあげる。

『満文三国志』は娯楽小説として翻訳されたわけではなく、兵書、或いは歴史書として翻訳を行ったことが序文にみられ、刊行後に著されたいくつか資料からは実際に兵書としての役割が果たされていたことを窺い知ることができる。そしてその底本については先行

研究に基づき正史『三国志』ではなく嘉靖本『三国志演義』の系統の版本であったことを確認する。

続けて雍正本に見られる漢文部分に対し、すでに言われている『李卓吾先生批評三国志』に基づくとされる説を確認し、さらにこれら二本に加えいくつかの書写本、「順治本」の抄訳とされる朝鮮司訳院で刊行された『三訳総解』、また、現代錫伯語による版本の概説を行い、また、それぞれの所蔵状況に関してまとめた。

後半では満洲文字のローマ字転写法を提示する。本論文ではこれまで多く用いられてきたメルレンドルフによる転写法をほぼ踏襲しながら、専ら漢語音韻を表すために後から作られた外字については異なる転写法を用いる。具体的には以下の通りである。

〈表 1・外字転写法の対比〉

文字	本稿	M 式	例字	文字	本稿	M 式	例字	文字	本稿	M 式	例字
	ts(V)	ts'(V)	倉		tsy	ts	詞		c'i	c'y	赤
	dz(V)	dz(V)	臧		dzy	dz	之		j'i	jy	植
	s(V)	s(V)	桑		sy	sy	司		ši	ši	世

（M 式とはメルレンドルフによる転写法）

最後にあわせて当時の満洲語の音韻状況を示す。

第 2 章　近世語音資料について

本論文では『満文三国志』に反映された字音を他の漢語近世語音資料と対比させることによりその特徴を明らかにすることを図っている。その際に漢語資料として主に取り扱う資料の概要をまとめたのが本章である。本章で取りあげた資料は以下の通りである。

〈表 2・本章で取りあげた近世語音資料〉

書名	著者	刊行年代	備考
中原音韻	周徳清	1324 年	元・大都の字音を反映しているといわれる。それまでの韻書と異なり『中原音韻』では先に韻類による分類が行われた。具体的な音を表す記録はなく、音の区別のみ提示する。
四声通解	崔世珍	1517 年	朝鮮司訳院において出版された。ハングルに

			より漢字音を表す。「正音」(『洪武正韻』1375の音系)、「俗音」(15 世紀半ばの北方語音)、「今俗音」(16 世紀初めの北方語音)の三種類の字音を反映する。
韻略易通	蘭茂	1442 年	明代の北方語音を反映する資料であり、20 類の声母を 1 回ずつ用いた「早梅詩」を載せる。
西儒耳目資	金尼閣	1626 年	宣教師によるローマ字を用いた初めての韻書である。当時の南京官話を反映しているとされ、入声が他の声調とはっきりと区別される。
韻略匯通	畢拱辰	1642 年	『韻略易通』を改編する形で作られた。『韻略易通』と共通する点も多いが、入声韻尾の区別をなくし、また、-m 韻尾の消失を反映するなどの違いも見られる。
(満文三国志、1650 年)			
語言自邇集	ウェード	1886 年	ローマ字を用い当時の北京官話を記録した資料である。『満文三国志』以後の出版であるが、本論文では『満文三国志』と現代北京語の間の段階を反映した資料として扱う。

以上の 6 種の資料について、それぞれの編纂の経緯、また、各々が持つ音韻的特徴を説明し、また、先行研究による分析に基づき、本論文において資料間における字音の対比を容易とするためいくつかの点において改めた表記法を提示したのが本章である。

第 3 章　『満文三国志』における声母表記について

本章では『満文三国志』に現れる漢字音を反映している満洲語表記のうち、声母について分析を行ったものである。方法としてはまず対応する漢字を中古音の音系を示している『広韻』における分類に基づき、三十六字母ごとにそれぞれが『満文三国志』で表記されているかを見てみる。その際、規則的及び例外的な表記であるという概念を中心として、後者については特に個別的な状況を詳細に分析し、なぜ例外的な状況となっているのか、そのような状況となっているのは果たして『満文三国志』に限られるのか、あるいは他の北方語音資料にも見られることなのか、さらには現代北京語における状況との対比を行うことによって論を進める。分析の結果として以下のような満洲文字で声母が記されていることが明らかとなった。

〈表 3・『満文三国志』における漢語音声母表記〉

b /p/ ban 班, bei 備	p /p^h/ ping 平, po 破	m /m/ man 満, ma 馬	f /f/ fang 方, fei 飛
d /t/ dung 東, di 地	t /t^h/ tang 唐, too 陶	n /n/ nan 南, nu 奴	l /l/ lung 龍, lio 劉
g, g' /k/ gu 古, g'o 葛	k, k' /k^h/ ke 恪, k'ang 康	h(-i 以外) /x/ hūng 洪, han 漢	
		h(-i)/ç/喉音,歯音一部 hi 喜, hiowan 宣	
j(i-) /ts/, dz /ts/ jing 精, dzu 祖	c(i-) /ts^h/, ts /ts^h/ ci 斉, tsoo 曹	s /s/ (-i 以外) san 三, sun 孫	
j(i-) /tɕ/ 牙音 jing 経, ji 季	c(i-) /$tɕ^h$/ 牙音 cing 慶, ci 奇	s(i-) /ɕ/ 歯音, 喉音 si 西, sing 興	
j(i-以外) /tʂ/, j'i /tʂ/ jang 張, j'i 治	c(i-以外) /$tʂ^h$/, c'i /$tʂ^h$/ cang 長, c'i 池	š /ʂ/ šang 上, ši 詩	ž /ʐ/ žan 然, žin 仁
零 /ø/ an 安, ing 英			

声母に用いられる満洲文字は 22 種類あるが、それがすなわち個別に漢語の声母の数を表しているわけではない。b、p、m、f などにおいては満洲文字と漢語声母がそれぞれ一対一で対応していると考えられている。一方、g と g'、k と k'などは後ろに続く母音字によりどちらかのみが用いられ、満洲文字としては異なるものの共に同一の漢語声母[k][k^h]を表していると見られる。また、逆もまた然りと言え、精組字由来の j(i)-と dz-は異なった満洲文字が用いて表記されるが、漢語音素としては共に[ts]を表していると見られる。上記の表を漢語音素を中心としてあらためてまとめると以下のようになる。

〈表 4・『満文三国志』に反映された漢語声母〉

p	p^h	m	f	ts	ts^h	s	
t	t^h	n	l	tɕ	$tɕ^h$	ɕ	
k	k^h	x	ç	tʂ	$tʂ^h$	ʂ	ʐ
ø							

このような『満文三国志』における状況は「早梅詩」と比べると以下の違いがあるということができる。

・牙音字の口蓋音化が始まり、喉音字においては歯音字との合流が起こっている。

牙音字においてはそれぞれ本来想定される gi(-)、ki(-)という表記は多くなく ji(-)、ci(-)と表記される箇所がほとんどである。また、喉音字については牙音字とは並行せず、喉音字、歯音字ともに hi(-)、si(-)という表記が行われている。前者については精組字が gi(-)、ki(-)と表記されることはないことから、精組字は[ts][ts^{h}]という声母を保ちつつ、牙音字のみ[tɕ][tɕ^{h}]へと変化しており、共に同一の満洲文字である ji(-)、ci(-)と表記されたと考える。一方、喉音字に関してはそれと異なり、相互に混用されている様子が見られることから、既に合流が起こっていたと見る。そのため、hi(-)と表記される字については他の母音が続く場合に比べより口蓋音化した[ɕ]を別に立てた。

・微母の消失

「早梅詩」では微母字は零声母字と区別されるのに対し、『満文三国志』ではいずれも零精母字として扱われ、微母が特定の子音字を用いて表記されることはない。また、疑母についても同様であり、零声母として表記される。

また、現代北京語と比較を行うと、声母の類別についていえば[ç]において差違が認められるのみであるが、尖団音については明らかに状況が異なる。また他にも歯音字においては現代北京語とは大きく異なり、韻母により表記が違っていることが挙げられる。

〈表 5・『満文三国志』精荘知章組声母字音〉

	精組	荘組	知組	章組
通	dz（総 dzung, 中 dzung, 終 dzung）			
江, 梗二		dz（荘 dzuwang）		
止	dz（子 dzy, 淄 dzy）		j'（知 j'i）	dz（芝 dzy）

さらに個別の字についても単なる誤認以外にも違いの見られる字もあるが多くはない。

第 4 章　『満文三国志』における韻母表記について

本章では前章で声母に対する分析を行ったのに対し、韻母に対しての分析を進める。韻母については『広韻』二百六韻の体系を中心に、まずは平上去声（舒声）と入声に分け、それぞれにおいて摂ごとに分類した。それにより得られた『満文三国志』における韻母表記の状況は以下のようであるということができる。

〈表 6・『満文三国志』における漢語音韻母表記〉

-a /a/ ma 馬, da 達	-iya[ya] /ia/ jiya 嘉, ya 亜	-uwa[wa] /ua/ hūwa 華, wa 瓦	

-e /ə/ be *伯*, de *徳*	-iyei [yei] /iə/ biyei *別*, yei 野	-uwe /uə/ guwe *国*, hūwe *獲*	-iowei[yuwai] /yə/ siowei *薛*, yuwai *越*
-o[o] /o/ ho 何, lo *洛*, o 阿	-iyo[yo] /io/ jiyo *角*, yo *約*		
-ai[ai] /ai/ lai 来, ai 哀	-iyai /iai/ giyai 街, jiyai 階	-uwai[wai] /uai/ hūwai 淮, wai 外	
-ei /ei/ bei 備, nei 内		-ui[wei] /uei/ tsui 崔, wei 魏	
-oo; -ao[oo] /au/ moo 毛, g'ao 高, oo 鰲	-iyoo[yoo] /iau/ biyoo 表, yoo 耀		
-eo[eo] /ou/ jeo 周, eo 区(姓)	-io[io] /iou/ lio 劉, io 右		
-an[an] /an/ man 満, an 安	-iyan[yan] /ian/ siyan 先, yan 燕	-uwan[wan] /uan/ guwan 関, wan 万	-iowan[yuwan] /yan/ hiowan 玄, yuwan 袁
-en[en] /ən/ ben 本, en 恩	-in[in] /in/ lin 林, in 陰	-un[wen] /un/ sun 孫, wen 文	-iyun[yun] /yn/ jiyun 軍, yun 雲
-ang[ang] /aŋ/ jang 張, ang 昂	-iyang[yang] /iaŋ/ hiyang 項, yang 楊	-uwang[wang] /uaŋ/ guwang 広, wang 王	
-eng /əŋ/ deng 鄧, ceng 程	-ing[ing] /iŋ/ ling 陵, ing 英	-ung[ung] /uŋ/ nung 農, ung 翁	-iong[yung] /yŋ/ ciong 瓊, yung 永
-i[i] /i, ɿ/ si 西, j'i 治, i *翼*	-y /ɿ/ dzy 子, sy 司	-u[u] /u/ gu 古, u 呉	-ioi[ioi] /y/ lioi 呂, ioi 于
[el] /ɚ/ el 二, 児			

([]の中は零声母における表記//の中は音素、斜体は入声由来字)

上にまとめた表からは、現代北京語とかなり近い状況が反映されていることが分かる。一方、異なる点も少なくはない。以下にそのいくつかを挙げる。

・入声由来字の表記

現代北京語では宕江摂および曽梗摂、通摂字において文白異読が見られる字が少なくないが、『満文三国志』では多くがそれらのうち文語音に近い表記がなされている。また、現代北京語において入声由来字のみに見られる韻母-üe はまだ見られず、それに対応する表

記として満文三国志では-iyo、yo が見られる。他にも「国」が guwe と表記され、「郭」g'o などと区別される。

・果摂字における開合の区別がないこと

現代北京語では果摂字において、開合の対応が比較的不規則であるが、『満文三国志』においては開合の区別なく-o と表記される。なお、後の満洲資料（『清文啓蒙』など）では開口字は-e と、合口字は-o と表記されるものも見られる。

また、声母と同様に個別的に現代北京語と異なる表記がなされる字も見られる。

第 5 章　版本間における表記の差違について

本章では『満文三国志』の最も古い版本である順治本と、その後の満漢合璧形式を取る雍正本において、どのような表記の違いが見られるか、特に漢語語彙表記に注目して以下のようにそれぞれの性質によりまとめた。

・韻母、声母表記の違い

例えば順治本において-n が想定されながらながら-ng と表記されている箇所が 9 箇所あり、その反対に-ng が想定されながら-n と表記される箇所が 1 箇所ある。雍正本の同一箇所を見てみると、これらあわせて 10 箇所のうち 7 箇所で本来想定される表記で書かれており、逆に順治本で想定通りに書かれ、雍正本で新たに想定に反する表記が見られるようになったのは 1 箇所に限られる。

声母表記においても同様の状況が見られ、特に専ら漢字音を表記するために後から加えられたいわゆる外字の表記では顕著である。例えば知照組字を表す外字 j'i は順治本においてはその元となった ji と表記されている割合が高いのに対し、雍正本ではほとんどが以下のように j'i と書き改められている。

〈表 7・二本における j'i、ji 表記〉

		知照組字（j'i が規則的）							
字		植	直	治	質	騭	知	執	智
順治本	j'i	60	3	17	20	7	3	2	2
	ji	16	36	10	2	4	5	4	1
雍正本	j'i	76	39	27	21	11	8	5	3
	ji	0	0	0	1	0	0	1	0

このような状況は c'i、dz-、ts-など他の外字においても同様である。ここからは順治本編纂時には外字が制定され十数年が経っていたが、まだ完全には定着しておらず、雍正本の頃にはほぼ定着したという満洲字表記上の要因があると見られる。

・尖団音の区別

順治本では破裂音については尖団音の区別なく ji-、ci-と表記され、gi-、ki-と表記されるのは古い時期に満洲語に取り入れられた語（主に一般名詞）がほとんどを占めている様子が見られた。一方、雍正本ではそれらの語に加え、いくつかの箇所において団音が ji-、ci-から gi-、ki-へと変更されている例が見られる。また、摩擦音においては順治本で尖団音が共に hi-、si-と区別なく表記されているが、こちらについては破裂音と異なり本来あるべき表記へと変更が加えられているという傾向は特に見られない。なお、雍正本より先に編纂された『満文金瓶梅』では尖音と団音が完全に区別されている。

・個別的な字音の修正

これについては順治本における明らかな誤記を雍正本において修正したものであり、動機はわかりやすい。一方、順治本で正しく書かれながらも雍正本で誤ったつづりとなっている箇所も少なくない。また、雍正本では順治本にほとんど見られなかったそもそも満洲語として存在しない綴りで書かれた箇所も見られ、それは満洲語書写能力が不足していたために起こったものであると考えられる。

・字音、語の変更

いくつかの字では順治本と雍正本において表記そのものが変更されている。一つには依拠した方言の違い、あるいは時代における変化を反映していると見られる。また、一方では順治本が依拠した嘉靖本三国志演義と、雍正本が依拠した李卓吾本三国志の語の違いにより人物名、地名などの満洲語表記が丸ごと変更されている箇所も見られる。

終　章

終章では、これまでに述べてきた『満文三国志』に反映された漢語北方音について総括を行うと共に、また、同一の漢字に対する複数の表記から、翻訳者の違いを見いだすことについて、実際の例を挙げ、現実には困難であることを明らかとした。逆から言えば、このことは『満文三国志』における漢字音表記にばらつきは少なく、表記された内容から見てもかなり高い水準で多くの人たちに漢字音が認識されていたことを表していると言えよう。また、『満文三国志』が基づいた基礎方言については、北京語や南京語であったとする説に加え、歯音字及び舌音字に対する表記から、膠遼官話地域の影響がある可能性も指摘した。

『満文三国志』は韻書のように細かい審音を経たわけではないが、当時の北方語音の様子を如実に表す資料として中国語音史研究に資するものであると言うことができるだろう。